

ふるれん
歳時記

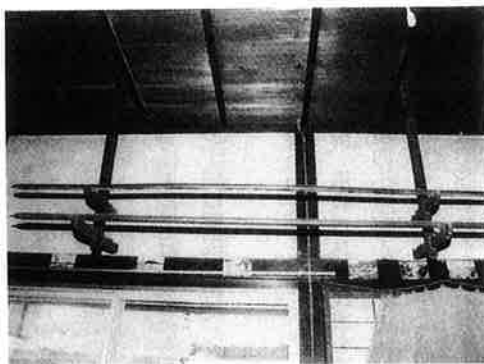
◆中野村大庄屋河野家

藩主休泊所解体さる！

本匠村笠掛の旧大庄屋時代の建物が
六月三日解体された。この建物は領内



20数年前の外観



式台の間に残る槍掛け

巡見の藩主を迎えるために別棟として
建てられた。上段の間があり内部意匠
も格式の高い書院造りで、廻り縁の外
側に庭園が築かれ土塀によって視界を
遮っている。

母屋が新築されてからは物置に使わ
れていたが、雨漏りのため屋根ははげ
床は落ちて危険な状態になっていた。



最後の見納めに取り残した物はない
かよく見ると、明治期の写真などが床
下に見捨てられている。床の間の吊り
戸の中をまさぐってみると、ネズミの
糞の中から出征職が三本「山名忠雄君」
は城下の山名家から養子に入った人物、
古い掛軸が一本、外に放り出されてい
た布岳の「堪忍袋」の額、いずれも傷
みがひどいがもらって帰った。外には
草葺き屋根の棟に使った大瓦が一基、
また一つ古い建物が消えた。

孔子の言動を記し孝道を説く。

〔大学〕二冊

学問と政治について論じたもの。

〔中庸〕二冊

中庸の徳について論じたもの。

〔論語〕七冊

孔子と高弟の言行を収録した。

〔孟子〕四冊

孟子とその弟子達による著述。

〔詩経〕二冊

最古の詩篇、儒教の基本教典。

〔書経〕二冊

中国最古の歴史書。

〔易経〕三冊

五経の筆頭、占筮に用いられる。

〔春秋〕二冊

中国春秋時代の歴史書。

〔礼記〕二冊

礼に関する古典を編纂したもの。

〔小学〕四冊

初学者用の心得・修身の格言。

〔十八史略〕八冊

三皇五帝、南宋滅亡までの歴史。

〔春秋左氏伝〕一冊

〔春秋〕の注釈書の一つ。

〔六韜〕

中国の兵法書。その他



江戸時代の教科書類

◆桐山人筆「韓信の股ぐり」

晞干区 野々下 晃

昭和四十三年二月二十六日から約十日間かけて収録した骨董品の中にこの画が載っているが、その伝来した来歴等について次のように記録されている。

桐華山人（王昱）のこと

韓信の股ぐりの画

学名曰、初号東莊雲機山人。又款議に雍正庚、成春日東明王昱、画印文に巨昱稽山などあり、この画の桐華山人写の下に押してある印を解読すると枕涼とある。このような号か字名もあつたのであろう（国朝書尽家筆録）に詳しく載っている。

この画家は西暦紀元一六五〇年から一六六〇年頃生まれた人で、今を去る三百余年前活躍した人である。十峰という印もあり、康熙年間の人。王時敏・王原祁・王鑑・王翬・呉歷・惲寿

平、以上の六作家を明末清初の四王吳
惲と呼び当時の巨匠であるが、その中
でも筆頭王時敏はその祖父に当たり、
二番目の王原祁は従兄に当たり、これ
らの人の力作はいずれも、我が国にお
いて重要文化財に指定されている狩野
派に匹敵する名族であろう。

この画の右側下部に遊印がある。『弓
文会双』と解読されると「文武共に会う
の意で、日本的に訳すると「文武両道」
の意であろう。いかにも支那式である。
八幡丸家が隆盛を極めた曾祖父か、そ
れ以前に求めて伝わったものと思つう。

父はこの方に殆ど無趣味な人で、四
女ダイが神田磯吉に嫁ぐ時この画が清
朝一流の画家作であることも知らず、
彼が短慮であることを戒めて与えたも
ので、磯吉が支那大陸のかつての満州
鉄道会社に勤務していたころは、この
画家の国である支那の大連・鞍山・海

州などの地を所持者と共に転々として、
昭和十六年頃に彼が退職した際、再び
日本に渡来したもので不思議な縁と云
うべきである。

因みにこの画が唐画で清朝時代の名
門王昱Ⅱ桐華の作であることが判明し
たのは、昭和四十九年頃古江の石田文
生氏所蔵の「支那有名画家落款印譜集」
に桐華居士Ⅱ王昱を見よ：とあること
から探索したもので、それまではこの
画が支那画であることすら識る人はな
かった。

そのため斯様な形で伝来してきたが
もしこれが早くから清朝の名筆である
ことが周知されていたら八幡丸家が倒
産する前にどこかに流出していたと思
う。

昭和四十九年十二月、表装界では人
間文化財に指定されている京都の矢口
氏に、これまで関係の深い潮谷寺の手

を経て表装を依頼、翌五十年六月完成
した。

※「韓信の股くぐり」

中国の秦末から漢にかけて活躍した
武將韓信が残した故事「大きな志を
持った者は、ささいな恥辱を意に介さ
ない」という意味の教訓になっている。

◆佐伯領内伊能図（複製）入手

今年二月三日の大分合同新聞に

「伊能図大図の模写 海保で発見

大分、佐伯精密に再現」

という記事が掲載された。昨年出版さ
れた「伊能図大図総覧」には米国議会
図書館所蔵の「大分・佐伯」図が使用
されたが、色付けもなく情報量が少な
いという。

今回見つかったものは旧海軍水路部
が明治初期に模写したとされる。今ま
で知られている伊能大図の中で最も美

しい。…と説明されていた。

この度、四教堂塾が佐伯海上保安庁に問い合わせたところ親切に対応してくれ海洋情報部に連絡、複製サービスは民間に委託していることがわかり、早速注文し取り寄せた。なお四教堂塾ではインターネット「デジタル資料館」で『伊能忠敬測量日誌』佐伯領内分と『測量図』を公開している。

四教堂事務局 渡辺捷三

◆五十五年振りの再会

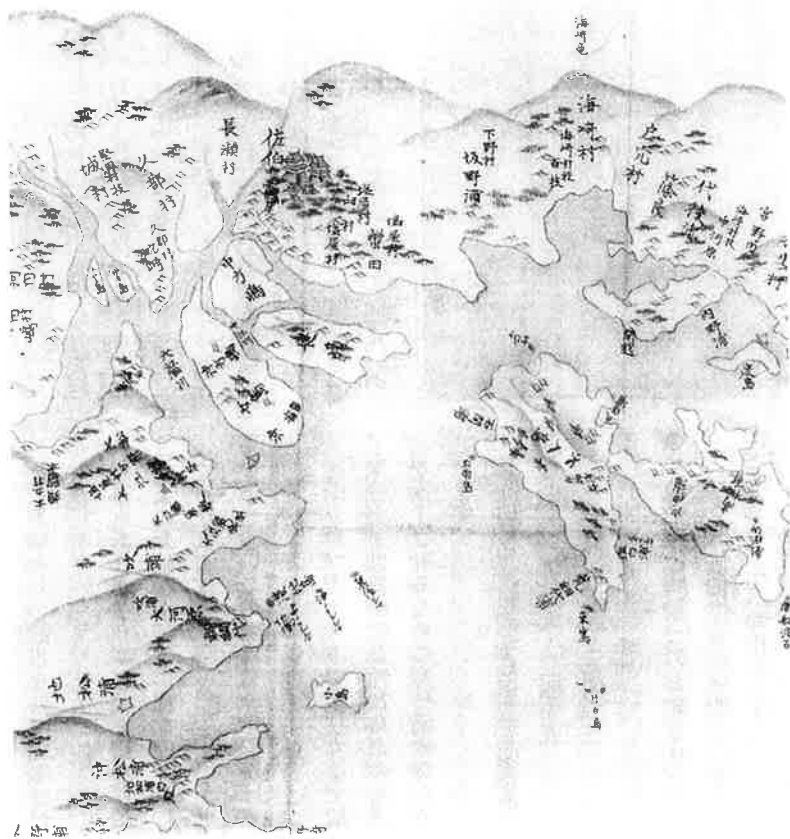
(平成十九年六月二十六日)

佐伯市長良 高司良恵

戦前・戦中・戦後をお互い船頭町で育った幼な友達が、五十五年振りにここ金水苑のロビーで再会する事が実現し感動の瞬間に涙がにじんだ。

その人は田洪喜代さん(二十才下)

迎えたのは、御手洗・後藤・高司の三



人 光陰矢の如し 幾星霜過ぎ去った
月日は、忽ち幼な日の あのこと！こ
のこと！と次から次へと話は尽きな
かった。

田洪喜代さんの紹介

(佐伯高女36回生卒業)

- ・佐伯市船頭町出身(現脇田歯科医院)
- ・父 脇田謙吾先生の長女 先生は佐伯高女校長先生を務められた。
- ・現在 中津市在住(結婚により)
- ・国際ソロプチミスト中津の会長
- ・合資会社 田洪醬油店の老舗に嫁ぐ、たしづ駐車場
- ・代表社員として御主人亡きあと 公私共々 日々御多忙 積極的な御活躍は目を見張るばかりの実業家。
- ・帰郷の目的は、国際ソロプチミスト設立の佐伯会に、指導助言を兼ねての講演に帰られ日程も大変な中、時間を都合していただきお話をすることが出来

た。

次から次と走馬燈のように駆けめぐる船頭町のあれこれが、長い年月を経ても昨日のように思い出され「よく覚えていいるなあ」の連発。「きよちゃん」と佐伯方言で語りながら、時の過ぎるのもつい忘れ、次の会の催促時間に致し方なく再会を約束して別れた。

お札の葉書より一部

過日は、ほんとうに楽しい語らいの



場を作って下さりありがとうございます

した。素晴らしい故里を持つて私はほんとうに幸せでございます。：略

お写真ありがとうございます。お三人のお姉様を見乍ら昔を思い出しております。

※中津へおいでの際は是非声をかけてお立寄下さい；との御伝言です。

・国際ソロプチミストアメリカは、地域社会と世界中で女性と女兒の生活を向上させるための奉仕活動をしています。

住所 中津市大字島田三五四番地
TEL 〇九七九〇二四〇五二二三
FAX 〇九七九〇二四〇五二二三

◆「佐伯氏位牌祭」のお知らせ

《佐伯惟治没後四八〇年》

日時 十一月二十五日(日)

一時半～法要・二時半～座談

場所 佐伯市稲垣護寺観音堂

来賓 大阪府吹田市 緒方惟幸氏

愛媛県西予市野村町出身・白木城緒

方藤藏人惟照（佐伯惟教孫）末孫。

※ご自由にご参加下さい。

◆再び緒方洪庵佐伯家の出自

先日、緒方惟幸氏から「緒方家五代・医の系譜」が送られてきた。これは緒方洪庵の五代孫で医学博士の緒方惟之氏が著者である。

話は変わるが、前々号に緒方洪庵の先祖佐伯氏は四国からの流れであろうと推測したが、五年程前、兵庫県（播磨国）加西郡の佐伯氏について調査に来た研究者があったことを思い出した。

というのも、緒方洪庵の本来佐伯氏は備中足守藩士で、その初代城主木下家定は北政所（秀吉の妻）の兄で慶長六年（一六〇一）に姫路二万五千石か

ら足守二万五千石へ転封されている。そこで姫路の佐伯氏が家定に従って足守に来た可能性を考えてみた。

かつて播磨国を治めていたのは赤松氏である。赤松氏は佐用郡佐用荘の地頭となり赤穂郡赤松村を名字の地とした。建武の新政によって播磨国守護職となり南北朝時代は足利尊氏方として活躍、

ついには播磨・摂津・備前・美作四カ国の守護になったのである。

ところが嘉享元年（一四四二）赤松満祐が將軍足利義教に怨みを懷き誘殺する事件が起こった。幕府は山名持豊を將としてこれを追討、満祐は敗れて自害した。

※満祐の末弟則繁は室ノ津から筑紫へ逃れ、豊後の佐伯に行き身をひそめていたが、乱が鎮まつて後本郡へ帰ってきて西笠原村に住したが、赤松姓を名乗るをはばかり、姓を「佐伯」と改め、その子孫は代々源右衛門と称したという。

似たような話が豊前宇佐郡正寛寺の村上家及び佐田郡山蔵の佐伯家に伝わっている。彼らの先祖は赤松一族佐用氏で南北朝時代の正平元年（一三四六）六月十日に播州佐用荘から宇佐御許山撰山へ奉敬にやって来たという。

墓碑の上にまた墓碑



おそらく赤松一族が北朝方に付く中で南朝に属した佐用氏は九州の懷良親王を頼ろうとしたのではなからうか。

その節、正覚山佐伯氏方に一泊し評定したところ、佐伯氏がここに居住してはどうかと言うので初めてこの地に開城したという。ここに居着いた一族は先祖の供養塔を建立した。

徳治二年（一三〇七）丁未正月六日
播州赤松之朝臣佐用監物尉定義為佛果

その後この一族は村上源氏を称し永享三年（一四三〇）五月三日、佐用姓を改め村上姓を名乗るようになった。

…と系図には書いてある。（左図は宇佐市文化財調査員・入学正敏氏が大分合同新聞に連載した「宇佐再見」より）

一方山藏の佐伯家は村上源氏の系譜（内容の真偽はともかく）を伝え「佐伯大和守義則 生国豊後佐伯住」から代々佐伯姓を名乗った系図である。

それぞれ名前や年代が異なっている

が、佐伯氏の家臣団に左内用膳・左用茂大夫（梅牟礼実録）・佐用玄蕃・佐用主水・佐用兵助（大友興廃記）などの名前が見えることから、佐用氏と佐伯氏の関係は必ずしも虚構ではない。

嘉吉の乱以後、赤松政則によって播磨・備前・美作の守護を回復したが、守護代浦上宗景の下克上によって赤松氏は播磨を追われた。赤松の一族、有馬氏は秀吉に従い近世大名となり、姫路城小寺氏を継いだのが黒田官兵衛、別所長治は秀吉に反して三木城に滅んだ。

その後、秀吉の義兄木下家定が二万五千石を賜り姫路城に入った。播磨佐伯氏は赤松・佐用一族の本流ではなかった故に戦国の動乱に生き残った。…といえるかも知れない。

◆西南戦争「豊日戦」研究の

先覚者・案浦照彦氏

拜復

台風の被害はありませんでしたか。

御手紙拝読いたしました。

公的に西南の役と呼称される事変、当時、豊日の戦いと俗称されていたのかも知れません。

小生が歩兵14聯隊（小倉）の西南の役戦跡を辿るため佐伯を訪れたのは昭和49年の秋だったと思っております。

その際、史談の先輩、羽柴弘先生と旅館で夕食を俱に懇談、昭和51・8・15

『兵旅の賦』との題で出版した際（330P）一冊、先生に贈呈、多分、史談の蔵書中に含まれていると思います。

見つからない場合を想定し、コピーして、関連箇所を同封しておきます。

秋草を分けながら、峠に登って行ったことを想起します。勿論、誰にも会わ

ず、この道が往昔の官道の一つだったのかと！

紙数の関係もあり、薩摩側の詳細は調査していません。若し、あれば、御教示下さい。
敬具

※福岡県春日市在住の案浦照彦氏は古くからの佐伯史談会員で、「佐伯史談」発送の都度、感想や助言を賜っています。

まえがき「本叢書の編集は、特に案浦照彦氏が、自衛官としての本務の余暇に、膨大な資料の研究、現地踏査、諸先輩を歴訪しての考証等、情熱を傾けて執筆に当たられた努力に対し心から敬意を評します。」

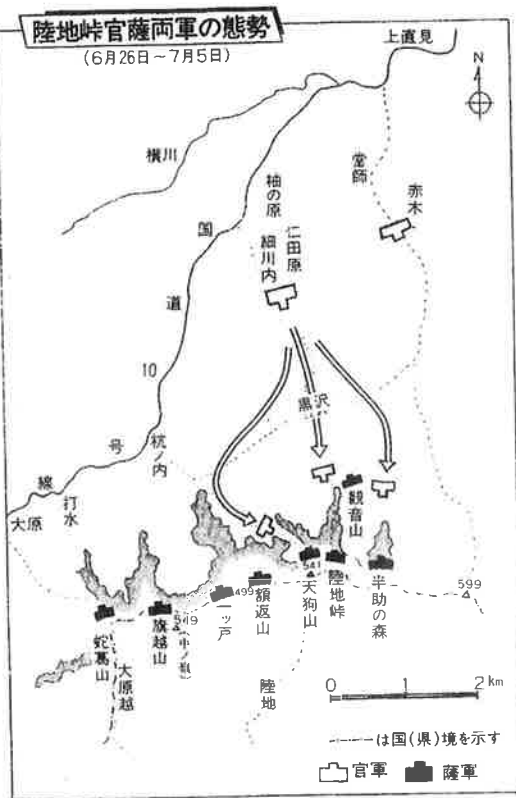
以下目次抜粋

11 豊後方面の戦闘 ◇豊日戦の特性

◇陸地峠の戦闘 ◇悲戦、蛇葛山



←北部九州郷土部隊史料保存会編・西日本新聞社



昭和十一年八月下旬
案浦照彦

◆西上浦の民家に残る書画

善教寺布岳（小栗憲一）の作品

狩生 野々下 静
解説 木許 博

今回は善教寺布岳の作品が揃いました。布岳上人は生涯数多くの作品を遺していますが、門徒衆から依頼されることと気さくに応じたようで、各地区に

残っているのもそのためと思われます。また漢詩の書や山水画、花鳥画などジャンルも広く多才であったことが伺われます。



①布岳71歳

①書

（本海崎上田家蔵）

一柱香烟心気融る 草庵有物对臙々
般舟三昧楽何若 唯在観音勢至中

七十一翁布岳（印）

○一柱の香烟心気融る 草庵物有り
臙々に対す 般舟三昧楽何れにか
若かん 唯観音勢至の中に在り。



②布岳74歳

②梅花図

（古江立石家蔵）

清浅水三里 孤高月一輪

梅花周老屋 中有染香人

布岳七十四翁（印）

○清浅水三里 孤高の月一輪 梅花

老屋を周る 中に香に染む人有り。



③布岳80歳

③梅花図 (本海崎垣之内家蔵)
(詩文同右)

布岳八十翁 (印)

④牡丹図 (本海崎垣之内家蔵)
芝蘭幽愈秀牡丹富不驕

甲寅四月祝 垣之内大人新築

鳳堂写 布岳題 (印)

○芝蘭幽かにして愈秀で牡丹富んで驕らず。

④布岳81歳



⑤山水図

(本海崎上田家蔵)

蒼黃歳事累家翁 每遇壑蛇以欲聾
隣友慇懃来慰我 南禅寺外有松風
半生専信好家翁 婢僕憐吾奢與聾
保後人間閑富貴 歳除隨意聽松風
寒山一路送吟翁 聞至林泉竟不聾
借問鳴東三萬戶 何人除日聽松風
乙卯春日写并題 旧作七絶三首
布岳八十二翁 (印)



⑤布岳82歳